

# 文書校正検査によるエラー検出特徴の分析（２）

## —開発した文書校正検査を用いた実験—

○中村 順子

（宮城学院女子大学人文科学研究科）

大橋 智樹

（宮城学院女子大学）

### 【目的】

研究（１）で開発した文書校正検査を用いて、文書校正作業においてどのようなエラーに気づきやすく、気づきにくいかについて調べる。また、教示によって作業条件を操作することがエラーの気づきに及ぼす影響について調べる。

### 【方法】

被験者：宮城学院女子大学生 77 名

刺激：研究（１）を参照

教示：（A）ひとつひとつの文字や単語を目で追いながら作業を行う

（B）文章の意味を考えながら作業を行う

校正作業制限時間：15 分間

被験者を教示 A 群と教示 B 群に分け、実験した。作業は黙読で行った。制限時間内に文書の最後まで作業できた場合には、被験者自身による作業内容の見直しを制限時間の最後まですることとした。作業後、エラーとなった漢字に関する知識を問う質問項目ならびに、文章理解度評定尺度に回答してもらった。

### 【結果】

分析対象データ：教示 A 31 名分、教示 B 30 名分

研究の目的を達成させる分析をするため、また、校正作業用文章内におけるエラーの配置、被験者の漢字の知識などを考慮し、次に挙げる 3 点のいずれかに該当する被験者のデータは分析から除外した。

□文章を最後まで読めなかった

□検出率 30%以下

□エラーとなった漢字の正字を 25 %以上知らなかった

#### 1. 類似型について

類似の種類(3)×教示(2)の 2 要因分散分析により、種類の主効果に有意差が得られた ( $F(2, 118)=61.353, p=0.000$  : 図 1)。

教示の主効果に有意差なし ( $F(1, 59)=0.509, n.s.$ )。

種類×教示の交互作用に有意差なし ( $F(2, 118)=0.230, n.s.$ )。

#### 2. 交換 1（おそらく）について

「おそらく」の誤表記の種類(3)×教示(2)の 2 要因分散分析により、種類の主効果に有意差が得られた

( $F(2, 118)=31.195, p=0.000$  : 図 2)。

教示の主効果に有意差なし ( $F(1, 59)=1.481, n.s.$ )。

種類×教示の交互作用に有意差なし ( $F(2, 118)=1.849, n.s.$ )。

#### 3. 脱落型について

脱落の誤表記の種類(2)×教示(2)の 2 要因分散分析により、種類の主効果に有意差が得られた ( $F(1, 59)=17.605, p=0.000$ )。

検出率は、脱落 1<脱落 2。

教示の主効果に有意差なし ( $F(1, 59)=0.233, n.s.$ )。

種類×教示の交互作用に有意差なし ( $F(1, 59)=0.003, n.s.$ )。

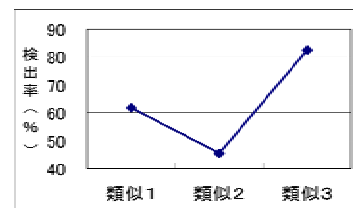


図 1：類似の種類についての主効果グラフ

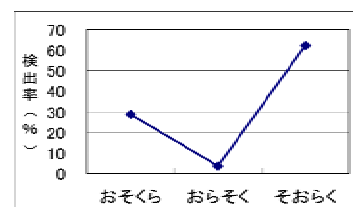


図 2：おそらく誤表記種類についての主効果グラフ

### 【考察】

#### 1. 類似型について

同音のエラー（類似 1）のほうが気づきやすいことがあきらかとなった。これは、視覚から得る情報（文字形態）と黙読中の体内で感じる音韻情報にずれが生じ、注意が向けられたものと考えることができる。

#### 2. 交換 1（おそらく）について

単語の最初の文字が入れ換えてあると気づきやすく、元の語のままであると気づきにくいことがわかった。これは、一文字一文字細部にまで注意が向けられているのではなく、単語をひとまとめにして認識していることを示唆する。

#### 3. 脱落型について

行をまたぐエラー（脱落1）の方が気づきにくいことがあきらかとなった。これは、行がえの際に、大きな眼球運動を伴うが、その間に意味的な補完が行われるためと考えることができる。